

オリーブの歴史

皆さんの生活に身近なオリーブオイル。その原料である「オリーブの歴史」についてご紹介したいと思います。オリーブはモクセイ科の常緑樹で、野生種は地中海沿岸からアフリカ北岸帯に自生しており、5,000年から6,000年前から栽培が開始されたそうです。古くから自生地域に住む人々からは「神からの贈り物」とされ、崇拜する価値のある神聖な木として扱われてきました。栽培の始まりは、西アジアに位置するシリアから始まったとされそこから西へ、トルコ、ギリシャ、チュニジア、イタリアへ栽培地域を広げていきました。

日本において、オリーブの産地として有名なのは、香川県の小豆島ですが、実は最初に伝来したのは現在の神奈川県横須賀市とされています。1860年代にフランスから輸入した苗木を植え栽培を試みましたが、長続きしませんでした。時を経て香川県は、1908年（明治41年）に農商務省指定のオリーブ栽培試験委託を受け、地元の人々の協力のもと、小豆島での産業オリーブの栽培及び収穫を成功させました。

オリーブオイルは、果実からオイルの変質を起こさないように物理的に採油されたオイルであり気象条件や土壌条件、収穫時期、栽培時期などによって、味や香り、栄養成分が大きく変わるとされています。オリーブオイルのなかで最上級のものが「エクストラヴァージンオリーブオイル」ですが、これは風味の良さや酸度の低さでトップクラスとされており、高いもので1瓶200ml入って1万円するものもあります。オリーブは1日15~30mlの摂取が目安量とされており、毎日接種することで抗酸化及び代謝機能の改善に大いに役立つとされています。

鎌野

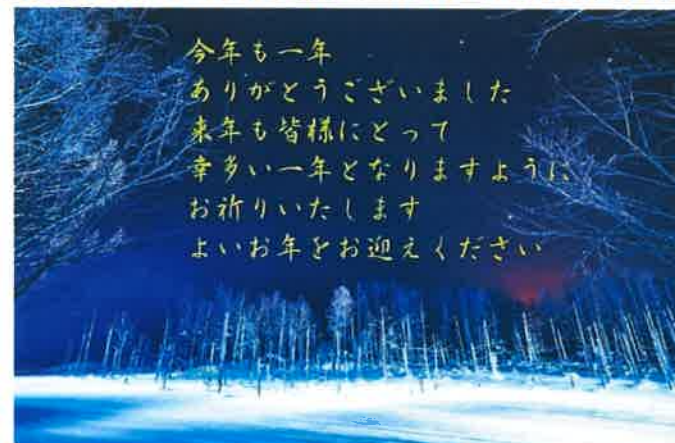
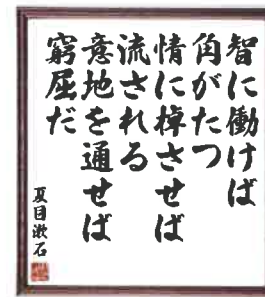


草枕

ついこの間まで、暑い暑いと言っていたような気がしますが、いつの間にか冬真只中。寒い日が続いていますね。人間なんて勝手なもので、寒けりゃ文句言って、暑くても文句言って、晴れば乾燥するし、雨降ればじめじめすると宣う。

夏目漱石の小説に「兎角にこの世は住みにくい」という一節が出てくるが、季節だけでなく、世界中がきな臭く住みにくくなって来ていますね。ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとパラスチナの戦争、シリアのアサド政権崩壊。その他にも内戦や紛争、戦争が世界各地で起きており、異常気象や疫病も頻繁に発生しており、食料や水不足に直面している人達も数えきれない程いるのに対し、なんの不自由もなく贅沢な暮らしを送っている人も沢山いる。生まれた場所が違っただけで天と地の差が生まれている。まるで生き地獄ですね。私にはそれを解決する力はありません。それを意識しながら生きることしかできません。不平不満は言わず、今日も一日、喜んで進んで働きます。

英樹



配り

第 307 便

勝亦製材駿河鉄骨株

住まい塾御殿場教室

TEL (0550) 87-0048

FAX (0550) 87-1237

〒412-0035 御殿場市中山518番地

息白く雪催いの年の瀬に花屋の店先選ぶ赤色
ねがみ



細やかな営み為すや冬の蜂小春日和のベランダに棲む
勝亦 りつ子



久しぶりに。

久しぶりに飲食店の内装のプランを考えています。7席程度の小さなカウンターバー。

まだ原案の段階で、大雑把な要望を聞いてレイアウトを考えているところ。今年中になんとか2案くらい提出したいのだけれど、年末という事もあり通常の現場の業務も慌ただしくなっていて、思うように時間がとれない。まあ、なんとかかなするしかないけれど。

台形の変形の建物。どうしても無駄な空白が生まれてしまう。でも7席確保しようと思うと、その空白をどうにか小さくしていかななくてはならない。オーナーさんのリクエストを踏まえつつ、カウンターの配置、トイレの配置、お客さんの動線、従業員の動線、什器も冷蔵庫だの製氷機だの、流し台やコンロ台、色々考えてあーでもないこーでもない、と考えるのはとても楽しい。まるでパズルゲームです。レイアウトプランが固まれば内装の仕様も考える。壁紙や照明、カウンターの高さや巾、材質、ボトルの棚も考えないとね。

まだ実際に工事をするかも決まっていない段階なのですが、こういう仕事って住宅とは違ったワクワクがあるのですよね。オーナーさんとイメージをすり合わせて素敵な空間を創っていきたい。うまく話がまとまってお仕事を頂いて、納得のいく仕上がりになって出来たらいいな。

オープンしたらとびっきり美味しい酒が飲めるんだろうな。

そんなこんなで今年も終わり。来年もよろしく願いいたします。良いお年をお迎えください。

柳田敏和



日々是新

現在、二十四節気の『冬至』:七十二候の「乃東生」(なつかれくさしょうず)12/22-26日:夏枯草(ウツボ草)が芽を出す。12/27-30「鹿角解」(おおしかのつのおつ):大鹿が角を落とす時期となります。2024年も、あっという間に過ぎてしまいました。年頭に『日々是新』で行こうと決め。途中萎えながら一年を過ごしてきたつもりです。つい最近“中山美穂”さんが不慮の事故であちらの世界に行ってしまったことは衝撃的でした。不慮の事故とはいえ本人もこの世のものではなくなったとは自覚していないのではないのでしょうか。人生いつどうなるかわからない…。このワードは同じ世代を生きる者にとっては切実なテーマとなります。若いころとは違う、余生という言葉が妙に隣に感じるのは私だけでしょうか?この先10年後、あれもできなかった、これもできなかったと嘆かないように、環境や人のせいにしないように、明日は生きているかどうかわからないのだから、思ったことは、とっととやろう。と思います。

年齢を重ねると経験の分、執着が生まれます。これが案外厄介だと最近気づきました。最近です。例えば洋服の断捨離、3年以上着ないのだから処分したほうがいいな。と、考えてもこの服は生地も良いものだし、傷んでもいない。買った値段もお高かった。デザインもレトロ感があって、まだまだ着れるかもしれない。手放すなんて勿体ない…。よくある話です。ここに未来に対する執着がある。服に対する執着がある。その服を着るのは今現在を生きている自分です。今現在を考えたほうがいい。高価な服も着なければ意味がない。未来に執着することはない。古着として他の方に着てもらったほうがいい。捨てる行為は、自分が考えるよりエネルギーが必要です。でも、物は活かさないとね。いやあ自分で言っていて耳が痛い。

昨日まで話していた人が、亡くなってしまい。明日はわからないのだから、過去を悔いたとしても、それは糧として一秒先を考える…。ことにした。つもり…。中山美穂さんのことで、もっと強く感じるようになりました。誰かが言った、「朝、目が覚めて一日が始まり夜布団に入って寝れば、まるもうけ」。別に悟りを開きたいわけでは…。ない。

もうすぐ2025年、令和7年、昭和100年。良い新年をお迎えください

ねがみ



年末大掃除

日本では大掃除が年末行事のようになっていて、掃除をして新年をスッキリと迎えたいと思う人が多いのでは無いでしょうか。年末の大掃除をするのは海外では少なくその国ごとの理由もあるようです。イギリス・フランス・ドイツなどのヨーロッパ諸国では「スプリング・クリーニング」といわれる温かくなる春に、アメリカも春。中国は2月の春節の前、プエルトリコでは大晦日に掃除をするが窓からバケツの水を勢いよく投げる習慣があるとか。アフリカ大陸のルワンダ共和国は毎月最終土曜の午前中は国民全員で大掃除をする日と決まっているそうです。大掃除の時間中はお店も開けられず、ほとんどの交通機関がストップする。昔は掃除をしない人は逮捕までされたとか。現在は罰金になっているそうです。

日本の年末大掃除にも理由があるのはわかるが、年末の気忙しい時期になぜ大掃除をしないといけないのか?と思ひこ数年は、気になった所を気になった時に片付け掃除するようにしている。ただ、台所の換気扇を先延ばしにしてしまい1年以上手つかずに…。カバーを外すのが怖い。気が重いけど今年中になんとかしなくては…。

祥子